『滑稽臍の茶口』―翻刻と解題―

"Kokkei Heso no Chaguchi" —Republication and Commentary—

前田桂子

Keiko MAEDA

【解題】

本書は国文学研究資料館所蔵の中本十六丁の小咄本一冊である。本文、挿絵ともに十方舎一丸が手がけている。一丁オに「画賦一麿」とあるのも、一丸の宛字で、同一人物であろう。刊記は嘉永四年（一八五一）に大阪御堂前の宇野松栄堂（近江屋善兵衛）が発行したことを示している。作者の十方舎一丸は、十返舎一九をもじった名前の通り、文人画家として活躍し、また一九の代表作『東海道中膝栗毛』の続編も手がけた一人で、国書総目録には『膝栗毛』『宮島土産』嘉永四年が挙がっている。噺本は本書の他に『落噺舌切雀』『落ばなし宝野山』『春のはつ風』『笑ひ袋』嘉永二年、滑稽本は『異国噺』嘉永二年、判じ物やなぞなぞの類には『酒宴道具一ト口俄』『新板手じなでんじ』『手妻はや合点』『手妻早伝授』『なぞかけ』、雑俳には『新柳樽』『宮嶋名所新膝栗毛』など、数々の作品を出したようであるが、人物について詳細は不明である。作品の会話部分に当時の代表的な江戸語である断定の助動詞ダ、原因理由のカラ、形容詞連用形の非音便形、ハ行四段活用連用形の促音便、命令形ロなどが散見されることから察するに、江戸で書かれたと見るのが自然であろう。版元が大阪とあるのは、幕末の大阪の書肆に顕著な、江戸の出版物の板株を買い求めて増刷したものか(注1)。本作は全ページ多色刷りの挿絵が入り、一話が一、二ページの短い笑話集である。内容は夫婦や親子、嫁姑間の人情を描いたもの（「世は情」「醉ごけ」「あふむかへし」）や、盗人の話（「しら浪」「成は否」）がある一方で、七福神や天狗、狐の異類譚など多岐にわたる。

【凡例】

1　翻刻は巻末掲載の国文学研究資料館所蔵本を主とし、虫損など

で読めない箇所は資料館公開の別本の画像データで補った。

2　変体仮名は原行の文字に改め、漢字は異体字を含めてなるべく原本の通りとした。改行も原本通りとしたが、行に収まらない場合は二行に渡って配置した箇所もある。本文と挿絵の配置は巻末画像参照。

3　原本で文字を□で囲んだ箇所は翻刻の際にも同様にした。

4　踊り字の一字点は「ゝ」「ゞ」で示し、二字以上の点は「〳〵」「〴〵」を用いた。

【翻刻】

外題実信

臍の
茶口
滑稽おとし咄

（表紙）

新製
臍の茶口
十方舎一丸　画作
辛亥初春　松葉堂寿梓

（見返し）

滑稽
臍の茶口叙

響に喜美談語一編を著しハ。余が戯作の濫觴にして。其製頤風味淡く。児女子の御口に漿ふまじと。あんの外に售たるハ。不計幸ひにして。筆まめの粉の山吹色を着服。御茶を濁せしを。はや十とせばかりのむかしとハ成にたり。其后ハ静老店ぶりて。寒ざらしの細き趣向に。心をこめの精まで。こつてハ思案に價より。骨折ことの甚しく咳をつき出すから臼拍子。ガツタリ　ヒチリト大汗かき。今亦更に新あん餅を製して以て。其風味を弘るもの

ならし

十方舎一丸識

（序オ）

いくとせかふるき
　はなしの洗たくハ
口にのりする
　まうけ也
　　けり

（序ウ）

一磨画賦

（一オ）

元日　由縁齋貞柳の狂歌に

百人首に。どふありとても
元日のあかつきは(注2)よりよき
ものハなし。ト　なるほど
ぐハんてうの心もちハ。
いつもながらどふもいへぬ。
ヲヽアノ。長上口もおさゝにも。雑煮いはうたら
節季のくたびれやすめ。ゆつくりいねても
つんだかよいトいへハ。　長「いねつむとハ。なんの
ことてこさり升　旦「いねつむとハ寝ることを
いふわい　長「イヤきめうわたしかつねにいねぶり
するを番頭さんが。船こぐ〳〵
いふてじやあつたが。
そんなら
けふのいねハ。
アノふねへ
つみませう

（一ウ）

世ハ情

「太郎兵へさん
只今御かへりか。
おはやひことゝ
いへバ　太「イヤ
旅へ出ても。
とかくかゝの
ことかあんじ
られて。ゐる
そらがせめ
から。はやくかへり
ました「さよかいな。
アゝちつとおそかつた。
御内儀にハもふごまの
はいがつきました

（二オ）

まハり気

初午　とていづかたも。
どんからちやがらにぎ
ハしく。子ぎつねとも
われハがほに穴
のくちをではいり
して。遊びたハむれ
ゐる所へある家より。
へぎにあつきめしと油あけのせて。
穴のくちへ置てかへると。子狐よろこび
「おつかアあのおまんがはやくたべたい
「イヱ〳〵。おとつさんにそふいつてから
たべさせます　人けんがだますから

（二ウ）

たまもの

ある座頭の坊。どふそ
ひとたび目をあきて。

（三オ）

妻子のかほも見たし世界と
いふものハどのやうであろふトしき
りにめかあけてほしく日ころ
ねんじ奉る。弁才天さまへ
七日さんろうしていのりけるに。
まんずる日にふしぎなるかな
美玉をふたつさづかると
みてたちまち両
がんはつちりと。
ひらきたるにびつ
くりし。うれし
くもありかた
しと　下へ

上より
千拝
百ぱい
して。
杖も打すて
よろこびいさみ。
さつ〳〵と。
もどりハ
もどつたが。
どれかおらが
内だ

（三ウ）

気ハ心

□「きさま役者に
なつたげなが。
日頃すきの道
だから。よくできる
だろふ。どふぞ大根と
いはれぬやうにしやれ
○「ナニ大根どころか。初ぶたいに
大ばねをやらかした
□「ハテナそれハでかした。
役ハなんだ
○「馬のあと足で

魔界

くらま山に。
僧正坊
上座
にて。
てんぐの大さか
もり。おの〳〵
魔じゅつくらべに。
みそをあげて
ゐる中に。ひとりの
てんぐおとなしく。
ひげしてたゞ。完尓〻〻
わらつてばかりゐるを。
僧正坊はるに見
やりて「コウどふ
したものだ。皆藝くらべ。
おの〳〵高慢をならべて。
さハぐになぜうかねへの。
チトこつちへ来て。
なんぞするがいゝ。
ナント。なんにも
しらぬといふのか。

（四オ）

（四ウ）

ハ、、、、、、
「イヤそふ鼻を
ひくゝすな

（五オ）

酔ごけ

あるそふおふなる
身代の内のむすこ。
ゆふ所へハかよハず。たゞ馬ずき
にて。間がなすきがな馬をのり。
とふ〳〵馬で身上を。
大かたにかたむけたれども。
やハり馬ハやめず。のりにゆき
けるゆへ。母親なく〳〵
いふやう。此しんしやう
大かたになし。三ツの
くらも二ツハ人にわたし。
やう〳〵ひとつばかり
のこりたり。口おしきことゝ
おこるを。息子ハ馬のみゝにかぜ □ヘ

□ヨリ「ついでに
そのひと▷

▷くら
も
のり
つぶ
し
たい（五ウ）

正直

□「ヲイ〳〵　関とり〳〵。
どふだ〳〵。
きのふのしやう
ぶハ　△「ム、
きのふ
の

すまふハ。
おらが
まけだい
□「イヤおめへハ
かてバ　いゝことを。
だれおしまぬ
ことだに△「イヤ〳〵。まけるはうがらくでヱ、

（六オ）

しら浪

ぬす人。ある
家をこじ
あけてはいり
たるが。ことの
ほかひんかにて。
座しきに親父
ひとり。じゆばん一枚にて。
火鉢にまたびしてゐたるか。
かのぬす人を。じろ〳〵と
みてよろこび「コレハ〳〵よふ
こそきてくださつた。どふぞ
茶代を。かしてくたされといへバ。ぬす人びつくり□ヘ

□ヨリ　して此家ハ
ぶつ
そふ
な

（六ウ）

浦島

うらしま太郎。
ひさ〳〵

にて。龍宮から故郷へかへり。
永〳〵海底にてせハになり
たる礼に。それ〳〵のしんもつを
おくらんと。いろ〳〵思ひ
つきの品をとゝのへ
けるが。たこと赤貝
にハ。何がよかろふと。
そふだんしけるに。ある人
しばらくかんかへて「それこそ松茸〳〵

（七オ）

あいさつ　しうとめ

「サアよめごりやう。チト
かたでももんでくだされ。アノよめ
しうとめといふて。よめハ
しうとめを。大切に
するがやくめじや。
ていしゆばつかり
かハいがると。ばちが
あたるぞや　よめ「ハイ〳〵
しう「わしがこなたをいぢる
のハ。やつばりこなたのてほん
じやぞ。やんがてまた。よめを
せいだして。いぢらねバならぬ
よつて　よめ「ヲホ、、、わたしハ。あなたほどハ
とてもよふいぢり升まい

（七ウ）

いすかの嘴

ある人友だちに
むかひ。コウきさまハ
しるめへが。
てめへのかゝを。
ぬすんだものが
あると。せけんで
大ひやうばんだ。きを
つきやれといへバ。
□「ソリヤアいつのことだ
「いつとつて
　此ごろのことだア
□「ヱ、うそをつけ。
山の神ハだアれも。もつていきやアしない。内におるに

（八オ）

両輪

七福神。びんぼう神に向ひて　　△ヨリ　かくれるゆへ　福の神「これハ
「イヤ　びんぼうがみどのハ。こちらが　　どふしたものじや
ためにハふくの神じや。ナゼといふに。こなたが　　ひん公　　マア〳〵□へ
あれバこそ。われらを人がうやまひ。
たつとんで。そなへものでも。して　　□より　こちらへ〳〵ト
くれるといふもんじや。コレガ　　いへバ
世界中みな。かね　　びんぼう神
もちばつかり
なれバ。わしらを　　「イヤ〳〵

いのるものハ
ひとりもない。
こちらが
たつとまるゝハ。
まつたく
びんぼう神
どの、
おかげじや。
なんとも一ぱい
かは
ねば
ならぬ。ト
もてはやされて。
びんぼうがみ
いたみ入。もぢ〳〵
して「コレハ〳〵
御あいさつ。いたみ
いり升ト。だん〳〵
しりごみして。
小かげのくらめへ　△へ

あふむかへし

母親(はゝおや)むすこに
むかひ「コレ
のん太郎。

とかく（八ウ）

ひんハ
うい
もの

くらい
クライ
もので
ござり升

△ヨリ どこ
ゆく
のだト

そなたハとかく。
夜あるきして。親に
くろうをかける。(チツト)
おやに孝行といふ
ことをしやれ。むかし
もろこしの廿四孝(にじうしかう)の
中に。もうそうといふ
人は。寒中(かんちう)にそのおやが。竹
の子がたべたいと。いはしやつたれバ。
どふぞ親ののそまるゝ。(とき)竿(たけのこ)がたべ
さしたいと。時ならぬ寒(かん)のうへに。
直(すぐ)にくハかたげて藪(やぶ)へ行。心の中(うち)に
おやののぞみを。とげさせたび
たまへと。神(かみ)ほとけを
ねんじながら。ゆきを
かきわけてみたれバ。
ふしぎや大きな竹
のこが。いくらもはへてあつたを。
なみだこぼしてよろこび。ほつて
もどつて。親(おや)にすゝめたといふことだ。(チト)そんなまねを
しやれといへバ。むすこしハらくかんがへ。何おもひけん土用(どよう)の
あつさに。わたいれをとりいだし。きかへてはせ
いでんとするゆへ　(はゝおや)「ヲヤこの子(こ)ハ此(の)あついのにわた入きて△へ

いへバ(ムスコ)
「ヱ、
しれた
こと。
こな
たの
すきな。
松(まつ)　（九ウ）
茸(たけ)
ほり
に

（九オ）

（十オ）

成ハ否

ある大家に。かねが
ふへて〳〵こまつて
ゐる所へ。ある夜
盗人はいりける
を。亭主大きに
よろこび。いろ
〳〵とぬす
人をちそふ
してもてなし
かねハずいぶん〴〵。よけいに
もつていんて。くださりませ。
まことにかねがあまりて。なんぎ
いたし候故。御しんせつにかたじけし
いづれのかねぐらなりとも。御勝手に
あけて。御とりくださりませト。
亭主あたまを。たゝみにすり
つけて。たのみけるに。盗人
　あたまをかきて。いかに
　ぬすびとなれバ。とてさう〳〵ハ
　とりがたし。せつかくの
　御たのみなれども。まづ
　千両のうへハ御めん
　くだされよと

□ヨリ
　たしといへバ
「イヤ
　御もて
　なしの
　ほどハ
かたじけなし。
しかし申さば
　われらハ
　小ぬす人で
　ござる
　何万両
　といふ。
　大がねを
　ぬすみくれ（十ウ）
よとハ。つき上りと
　申もの。イヤハヤ
「かねもち
　たけ〴〵
　しひ
　いへバ。ていしゆさよう
　なれバ。こんばんの
　ところハぜひなし。
又かさねて御同類がたと。御一緒に御出下され。
　せめてアノくら。一ト戸まへなりとも。おんありくだされ□へ
（十一オ）

ものしり

　ある人の女房。　▽△ヨリ　やうなまぬけどのに。
　したしき人にむかひて。　一日もついているとハ
「わたしが内の。どんだくれどのハ。毎日　いやだ。
〳〵のろけあるいて。女房のそバハ。　はやく
おそろしひもの、やうに。よりつき　ひま
やせぬ。どうするつもりであり　くだ
ませう。どんなにやか　されと。
ましくいつても。馬　むりに
の耳にかぜサ「ム、　ひま
イヤ爰のやどろくとのも。　とつて
ずいふんふんべつのある　いんだが
人だから。大かたぶら〳〵するのも。　あんのでう
時をまつのであろふ。むかし太公望と　太公望ハ
　（十一ウ）
いふ人ハ。あさもばんも。　西伯どのに
まつすぐなはりで。魚　か、へられて
つつてござつたが。ツイド　大軍帥
一疋のうをもつれて　に
ない。そこで山の神　なら

どのがおこつて。ひま
をくれろといふ。イヤ
せつかく今まで。
しんぼうして
くれたもの
だから。もちつとの
所しんぼう
しやれといふ
に。イヤ〳〵
こなたの　▽△

れた。
そこ
から
おん
なハ
よくのふかいもので。
それをきくと
後悔して。
どふぞもとの次へ
（十二オ）

ツぎキ　とふりもどしてくだされと。なみだをこぼしてたのんだけな。そのとき太公望が。盆へ水をいれてそこへ置。このみづを地べたへうちあけてみろといふゆへ。妻の馬氏なんの気もなくそこへぼんの水を。打あけたとき。太公望がいはれるにハ。そのこほした水を。もとのとふり盆へいれてみやれと。是にハ内儀どのもこまつた。時に太公望がいハれるにハ。わしがとめたときなぜとまらなんだ。いまさら出世をみて。もとへもどろふとハはくじやう也。ふくすいぼんにかへらず。ふたゝびかほみるもいやだと。
はりこまれて。山のかみどのハ首つゝてしんだとサ。そこだから
まづおんなハしんぼうだい一だ。ソレふくすいぼんにかへらず。よしか
内儀「そのふくすいどのハ。ぼんにかへらずだろふ。わたしが内てハぼんもせつきも。けへりやせぬ

不理屈　きつね狸に向ひて　「コウたぬ公おらア二月のはつ午から
して。だん〳〵まつりが
あるが。てめへハなんにも。
祭りといふことがねへの
たぬき「なくてさ　狐「ソリヤ
いつなんのまつりだヱ
たぬき「三月と十月に
トわらひながら
たぬ
きの
こん
ぴら
（十二ウ）

狂薬　生酔「ヤレコリヤ
家がまハる〳〵〳〵〳〵。
また目がまハりだした。アレ
まハるハ〳〵〳〵。コウ八公
どふぞ。家と目を
とらまへ
てくれ。
くるしひ〳〵
八「ワハ、、、、、ナニ。
家も目も
まハるのじやア
（十三オ）

ねへ。てめへが
のんだ。さけがまハるのだ　（十三ウ）

せいハ道

○「きのふ大きなし丶をとつた
△「フムそれハうまひことをした。
六そくか四そくか八そくか
○「あしハ常のとふり。四ツ足サ
△「ハ、、、、六足もの八足もの
とハ。そのし丶の皮で。
沓がなんぞくとれ
るかと。いふことた
○「ム、そのことか
ソリヤアしれた
こと。し丶の
十六足ヨ　（十四オ）

三五か十八

ある田舎もの。座摩
のまへをとふりけるに
軒をならへし
ふるてやども。おはいり〳〵
なんでござい。サア
おはいり〳〵。トよび
たつるに幸ひおひ
一トこしかハんと。ある
古手屋へはいる手代「コレハ
よふ御こし下さり
ました。けつこうな
おてんきで。へ、、、、サアこれへ
御かけ下さりませヱ、なんでござい。へイ〳〵　（十四ウ）
おもじでへイ〳〵かしこまりましたトいろ〳〵たして
みせる「コレハいくらしより升　古「へイ〳〵これて　△より
ヱ、。かういたしてさし上ましよ。御らうしませ。　古「何を
こないに。こぶのかはみたよふな地て。　じやら〴〵ト。
へ、、、、コレテ壱部ト　あなた
三百に　ほにう
いたして　では
おき　こさり
ましよ。　升まい。
りこうな　おね
しろものて　ぎり
へ、、、、「ヤレコリヤゑ丶ハゑ丶か　つぎへ
直たんも又ヱ、。ハ、、、二朱ならマアもらをかいの古めつそふな。
そないにまかるもんじやござり。イヤかういたしましよ。一部
三百に「イヤ〳〵　古「そんなら二朱に　「マアかめにせう　△へ
（十五オ）

ツぐき　なさつた直に。おまけ申ましよ。シヤレ〳〵　「アヤむりに
ハア。おんにきせて。まけてもらつちやアきのどくだア。マアよし
にしませう古「おまへさん。ねまでつけて。小へんハてき升まいト

いへば　田舎「小便ハたつたいまそこでたれて来もふした

木に竹

ある人大み
そかに払ひ
のかね才かく
できず。
ぜひなく
留主を
つかつて。
元日の夜のうちから　□より節季の
やくそくてかつた　（十五ウ）
礼にいでけるを。まんわるくかけとり　ものだ。
見つけて「ヲイ〳〵珎頭さん〴〵。なんべん　きんのふ
内へいても留主。　ござれ
とふしてくだ
さるのだ。
サア。いまこゝで
受とらふト。大ごへに
わめきちらせバ。珎頭郎おさまりかへつて。
元日さう〳〵からはらひができるものか。□へ
（十六オ）

うちはなす　十方舎
これや笑ひの
　種が嶋
あたりの心は
腹を
かゝゆる　めでたし〴〵〴〵〴〵

上章閹茂麦秋脱稿　（十六ウ）

製新　臍の茶口　編二

初編ニまさりて
口あたりよき新作
の咄しを数々あつ
めたる目さまし

十方舎一丸画作　艸也

嘉永四辛亥春

発版書房　宇野松栄堂
大阪南御堂前
近江屋善兵衛

注

1　浜田啓介「近世後期における大阪書林の動向」『近世文芸』第三号
丹治比郁夫「本屋仲間外素人の版木所有」『大阪府立中之島図書館紀要』第十八号
中野三敏『書誌学談義江戸の板本』岩波書店

2　「は」の横は見せ消し

	見返し、序		『滑稽臍の茶口』表紙
	一ウ、二オ		序、一オ

二ウ、三オ

三ウ、四オ

四ウ、五オ

五ウ、六オ

六ウ、七オ

七ウ、八オ

八ウ、九オ

九ウ、十オ

十ウ、十一オ

十一ウ、十二オ

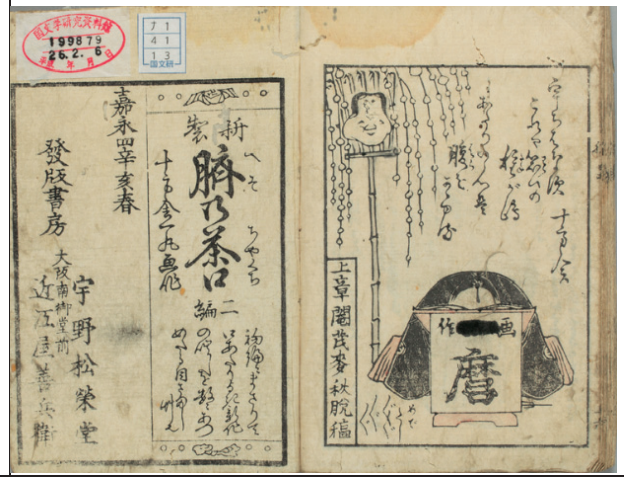
十二ウ、十三オ

十三ウ、十四オ

十四ウ、十五オ

十五ウ、十六オ

十六ウ、十七オ



十七ウ、十八オ